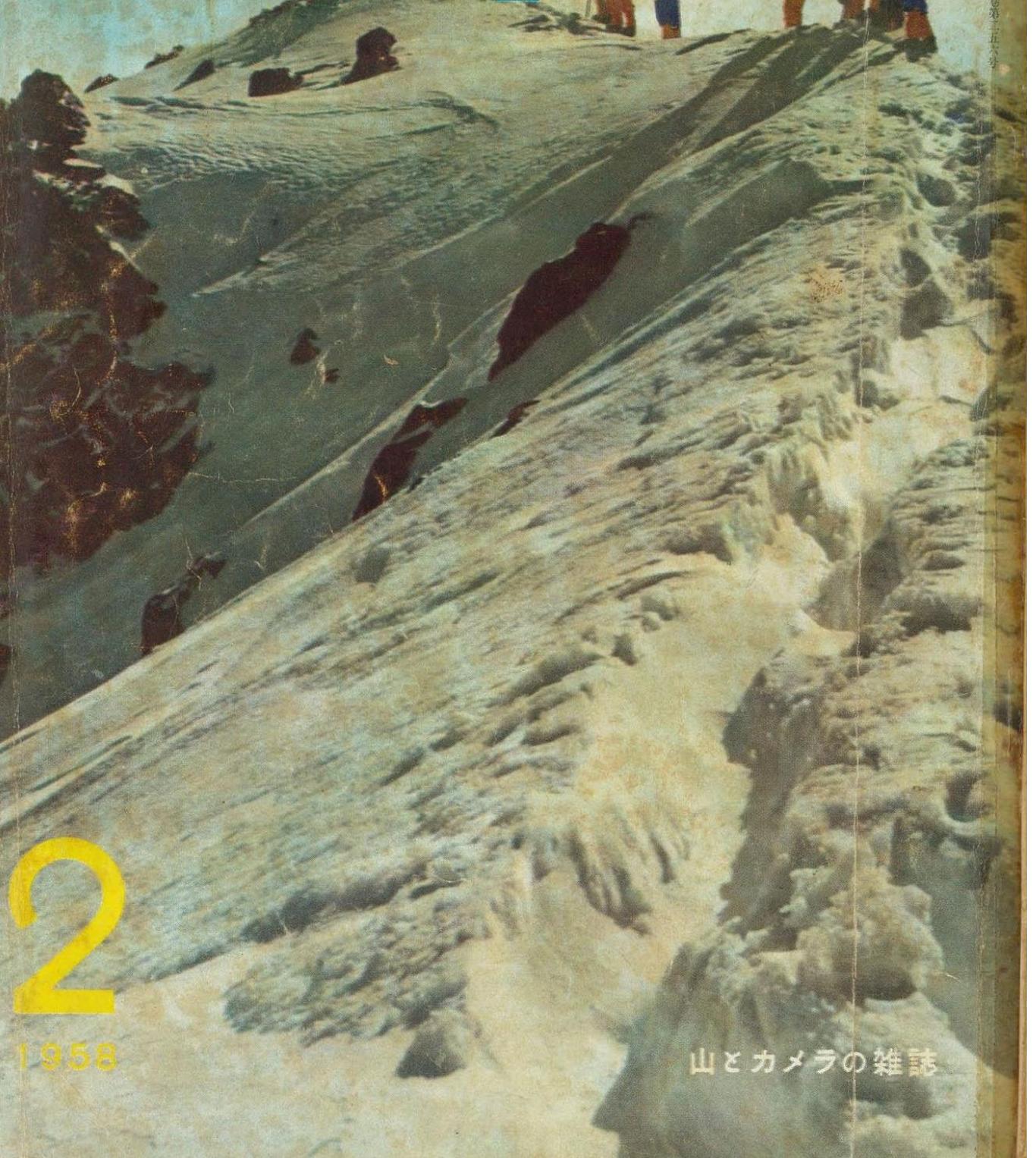


山と高原

特集 バッジテスト
シナリオ 氷壁



昭和二十二年十一月二十日第三種郵便物認可毎月(同二山発行)通巻第一号
昭和二十四年一月十五日(同)郵便局登録料不取扱第六六一四
昭和二十三年一月六日発行 通巻第二五八号

山とカメラの雑誌

シナリオ

原作 井上 靖

氷壁

新藤兼人



前穂高奥又白の岩壁

製作意図

山に憑かれた男の悲劇である。

1

銀座裏の小料理屋「浜岸」の店（夜）

魚津恭太、はいってくる。

肩にリュック、黒のハンチングベレー。

肩幅の広い五尺五寸の体躯。山からまっすぐここへきた感じ。

恭太「奥穂へ登ったんだ」

主人「もう余り人はいないでしよう」

恭太「二組しか会わなかった」

主人「いらつしやい。また山ですか」

女中がきて「いらつしやいませ」とリュックを受取る。

恭太、調理場に近い卓にかける。

客は他に一組いる。

恭太「ああ」

紋さん「いらっしゃい。山から？」

恭太「おあ」

紋さん「ビースの鐘を切りながら、先刻まで小坂さんがきてましたよ」

主人「そうそう、珍らしく飲まないで、飯を食べて帰りました」

恭太「そう、久しく会ってない。会いたかったな」

女中、銚子を持ってくる。

紋さん「まだいるでしょう、あのひとのことだから」

恭太「そうかな」

うまそろに一口飲む。

2

ときわ会館の二階

恭太、階段を上ってきて、店内を見廻す。

美しい卓が十五、六も並んで、恭太の山登りの服

恭太、階段を上ってきて、店内を見廻す。

美しい卓が十五、六も並んで、恭太の山登りの服

恭太、階段を上ってきて、店内を見廻す。

美しい卓が十五、六も並んで、恭太の山登りの服

恭太、「おい（肩を叩く）」

恭太「そんな挨拶があるかい」

恭太「近づいて、

恭太、「おい（肩を叩く）」

恭太「よお、お前か」

恭太「なんか挨拶があるかい」

恭太「近づいて、

恭太、「おい（肩を叩く）」

恭太「よお、お前か」

乙彦「(みじめに) いや、失敬、いまのは失言だ……おれ
昂奮してゐるんだな……」

恭太、いたわるようにみつめている。

乙彦「彼女はおれに、自分の口ではつきりと、おれを愛しているといつたことがあるんだ、クリスマス・イブの晚だ愛情を持つてない女が愛しているというようなことをいうだらうか。愛情というものが、一人の人間の心中で、そう簡単に跡方もなく消えてしまうことがあり得るものだらうか……」

恭太は眼をそらしている。

枯葉が二人の足許を吹きすぎる。

恭太「あの方は、主人と大分年齢が違うな」

乙彦「……」

恭太「八代教之助氏は五十七才、あの人は二十八才だ——さつき、人名辞典を調べたんだ」

乙彦「(低く) 後妻に行つたんだ」

恭太「(彼女からな)

乙彦「もうらつたんだ」

恭太、だまって、手をのぼし、そのライターをとる。

それは、赤い小さな女持ちである。

恭太、だまって、手をのぼし、そのライターをとる。

煙草をくわえ、ライターを出す。

乙彦「もうなづく。

16 八代家の台所(朝)

美那子、女中春江と朝食の仕度をしている。

かすかに、遠くから手が鳴る。

美那子、廊下に出で「はーい」と大きく応え、台所に戻つて、番茶を大ぶりの湯のみへいれる。

17 廊 下

美那子、小さな盆へ大ぶりの湯のみを乗せて、急ぐ。

美那子「心配になりましたの」

教之助「なにが」

美那子「今朝、茶柱を指でつまんだこと、ご存じだったんでしよう」

26 重 役 室

教之助「うーむ」

秘書、書類を持って出て行く。

27 八代家の電話

美那子「みてらしたんなら、叱つて下さればよろしいのにいやだわ、あんなおっしゃり方！ ねぎ臭いなんて」

28 重 役 室

教之助、笑つて、

教之助「いいじゃないか、どっち道悪気があってしたことじゃない。茶柱だかゴミだかしらんが、そんなのをとろうとしたんだろう。そのために指さしがちょっと湯に触れた——まあ、仕方のないことだらうね」

29 八代家の電話

美那子「そうでしようか」

30 重 役 室

教之助「別段そこに惡意は認められない、とがむべきことでもなさそだ——切るよ」

31 八代家の電話

美那子「ほかになにかありません？」

教之助「何が？」

32 重 役 室

教之助「なにが」

美那子「今朝、茶柱を指でつまんだこと、ご存じだったんでしよう」

33 八代家の廊下

教之助「茶柱のほかに？ なんのことだい！ 切りますよ」

34 駅前の公衆電話

恭太、かけている。

35 八代家の廊下

美那子「八代でござりますけど」

36 公 衆 電 話

恭太「小坂が最後にちょっとお眼にかかりたいっていうんです。いろいろと話しましたから、ご不快になるようなことは彼もしないでしょ。そちらでご都合が悪かったら、駅前まできていただけますか」

37 八代家の廊下

美那子、心をきめたように、

38 公 衆 電 話

美那子「宅のほうがよろしくうござりますわ」

乙彦「持つていらないといふんですね」

18 二階廊下

階段を上ってきた美那子、もう二三段というところで、ふと足をとめる。

湯のみに浮いてる大きな茶柱。濡れた指を白い前掛けで拭いて上る。

書斎は廊下の突当たりで、扉が半開きになつてゐる。

美那子、その扉へ。

19 書 斎(洋室)

八代教之助、瘦せた老駆をグレイのセーターに包んで、窓際に立つてゐる。

美那子、はいってくる。

美那子「お早うございます」

教之助「お早う」

美那子「お茶、ここへ置きますわよ」

教之助「トマトジュースが欲しかったんだ」

美那子「あら、お茶じゃありませんの」

教之助「お茶でもいい」

美那子「じゃ、持つて参りますわ、トマトジュース」

教之助「いいよ、お茶で——もう朝飯になるだろ。(と湯のみをとる)」

美那子「ええ、でも、まだ十分ぐらいかかりますかしら」と、去ろうとする。

美那子「少しネギ臭いな、このお茶」

教之助「少しネギ臭いな、このお茶」

美那子、はつとしたりように振り向く。

美那子「においます？」

教之助「うん、ネギ臭い」

美那子「かえてきましょ」

教之助「いや、よろしい(一口飲んで) 指にネギの匂いがつくってこんどな」

21 八代家・階下廊下

美しい秘書が電話にかかっている。

美那子、居間のほうから、新聞を持って出でてくる籐椅子にかけて、新聞をみようともせず、ほんやり、庭をみる。

22 東邦化工重役室

秘書「お机から眼をおはなしになって！」

教之助「はなしたよ。なんだね」

23 八代家の廊下

美那子、受話器を持っている。

24 重 役 室

教之助「はなしたよ。なんだね」

秘書、書類を整理している。

25 八代家の電話

恭太、出る。

乙彦、固い顔で見返している。

26 応 接 間

恭太と乙彦がかけている。乙彦は長身を二つに折って眼を伏せている。

扉が開いて、美那子、はいってくる。

恭太、立ちあがるが——乙彦は面を伏せたまま。

美那子「いらっしゃいませ」

恭太、目礼してかける。

37 八代家の廊下

美那子、向い合つてかける。

乙彦「(顔を上げて) いろいろ迷惑をおかけしましたがこんどはぼくも決心しました。きょうあがつたのは、あのままでするに会わないのでそのままになつてしまふのが、なんですかいやだつたからです」

美那子「すみません」

乙彦「すまないという言葉はへんですよ。あなた一人がこんなにぼくも決心しました。きょうあがつたのは、あのままでするに会わないのでそのままになつてしまふのが、なんですかいやだつたからです」

乙彦「一つだけお願いがあるんですよ。あなた一人がまないんじゃなくて、ぼくもすまないんです……すむとかすまないというのはやめましょう。お互がみじめですかから」

乙彦「……」

乙彦「一つだけお願いがあるんですよ。あなた一人がまないんじゃなくて、ぼくもすまないんです……すむとかすまないというのはやめましょう。お互がみじめですかから」

乙彦「大丈夫だ(美那子に) あなたの気持は、本当に魚津にお話しになつたようなのですか……ぼくに対しても少しきらいは愛情を持つて下さつたんでしょう」

美那子「蒼白い顔を向ける) こんなことを申上げるのはいやなんんですけど。あの夜は、わたし愛情を持っていたと思うんです……でも、そのほかの時は、——」

美那子「見てらした？」

教之助「何を」

美那子「(顔の硬張るの) おぼえながら) じゃ、いいんです」

教之助「折角の日曜だけど、今日も出なければならない」

美那子「会社ですか」

教之助「うん、原子力産業研究会議というんだ」

20 八代家の表門

高級車がすべり出て行く。



吉川英治氏著の「新・平家物語」

- 美那子「はあ」
乙彦「しかし、そういうことだとすると、人間の心というものはあまり信用できないということになりますね（みじめに顔をゆがめ）あなたは自分の口でちゃんと、ぼくを愛しているとおっしゃった」
恭太「よせ！」
乙彦「ぼくは素直にそれを信じたんです」
恭太「ゆうべあれだけ話し合って、君もよく納得したじゃないか」
乙彦「（耳をかさない）あなたが、ぼくという人間と無関係に、つまり、道で会ってもしらん顔をしてすれ違う人間に、なることを希望しているだけはよくわかりました！（立つ）魚津ぼくは先に帰る」
恭太も立つ。
恭太「いや、ぼくも帰る」
乙彦「一人で帰りたいんだ。帰らしてくれ」
ぶつかるように扉を開け、出て行く。
美那子、固い顔でかけている。
- 41 表 門
乙彦、泣き出しそうな顔で出て行く。
- 42 応 接 間
恭太、ソファにかけた美那子を見下し、尖った声で、
恭太「小坂の態度はともかくとして、彼のいったことは一応もつともに思えるんですが……彼のいうように、あなたのほうにうそがあるんじゃないですか」
美那子、顔をあげる。なにかはげしいものがふくまれている。
- 美那子「あなたには、もう、自分の恥を申し上げましたので、もう、何でもお話ししまいますが……わたしはうそはいっていないつもりです。間違いを起しました夜、わたしはの方に愛情を持っていたと思います。主人は一時間半」
- 50 徳沢小屋
辿りつく二人。
- 51 小屋の中
二人、送り届けてあるコンボウの箱をといている
恭太の声「一休みして送り届けてある荷物の整理をする」
- 52 小屋の表（朝）
- 53 雪原を行く二人
恭太の声「雪崩の危険を避けて、松高ルンゼの左岸の尾根沿いに中島新道を行く。急坂。尾根の背すじに出たところでワカンを履く——」
- 54 奥又の池
恭太の声「三十一日、朝七時出発」
- 55 テントの中（夜）
ウイスキー瓶の口に立てたローソクの灯で、恭太がノートへ日記をつけ終る。
乙彦は寝転んでいる。
恭太「風が出ているな」
乙彦「明日になればおさまるだろう」
恭太「雪がやんでいたら、三時半起床、五時出発だな」
乙彦「うん」
猛烈な吹雪——テントにぶつかってくる。
- 56 小屋
恭太、眼覚める。
時計を見る。三時。
風の音、やんでいる。
テントから、首だけ出してみる。
- 57 テントの中
恭太の声「出発、五時半……」
- 58 大雪原と空
おぞろしいほどに浮えて星が光っている。
- 59 テントの中
恭太、乙彦の肩をゆする。
恭太の声「三十日八時、ホテルの番小屋出発、積雪一尺、河童橋より明神池まで一時間かかる。更に徳沢小屋まで
- 60 テントを出発する二人
恭太の声「出発、五時半……」
- 61 そぞり立つ北壁の大岩壁
仰いで立つ二人。

恭太「全然危険がないとはいえないが——」

美那子「お帰りになつたら、お葉書下さいません——小坂さんのこと、心配ですか？」

恭太「おそらく大丈夫ですよ。何年かぶりで東壁をやつたから、多少世の中が違つて見えると思うんです。小坂にしても、こんな時のために、今まで山登りをしてきたかもしませんからね」

一ヶ月ばかり関西へ旅行していました……銀座のレストランでお食事をして、クリスマス・イブの街のなかを歩いていますうちに……お酒を飲んでみたいといったのはわたくでした、ホテルへ誘われたときにも拒みませんでした……でも、帰りの道で、わたしはもう泣きたいほど泣いていました。極くわずかの間のことです、の方を愛したのは……」

恭太「……」
美那子「あとで後悔することもわかっていました……夫のある女として、非難されることもわかつていました……でも、の方を求めてしまったのです……」

恭太「魔がさしたのでしょうか？」
美那子「ええ……でも、そんなものでもないような気がします。では——」

恭太「奥さん、この話はもうこれでおしまいにしましよう小坂も当分は苦しむかもしれません、あとは時間が解決してくれると思います」

恭太「ほんとに、すまないと思っています。傷つけてしまって——」

恭太「ぼくたち、この暮に、穂高の東壁をやることになります。小坂のために、これはいいことだと思います。でも、あの方を求めてしまったのです……」

岩壁は向うから自分たちに挑んでいる——八時からさり魔法瓶の口より、茶を一ぱいづつ飲んでザイルをつけ。長さ三十メートルのナイロンザイルは、はじめなり」

二人、大岩壁に取つつく。恭太がトップをやる。

62 岩

壁

登る二人。

恭太の声「三時、北壁を登りきって、漸くにして第二テラスに出る（ほつとして下界を見下す二人）所要時間、八時間。ここで昼食」

63 岩壁に吹雪はじまる

登る二人。

恭太の声「三時半、Aフェイスに取りつく。陽がかけり、風が出て、吹雪模様となる。登攀不可能……」

64 吹雪の岩肌の裂け目

二人、ザイルで二人の体を結び合い、ソエルト・ザックを頭からかぶり、体を寄せ合う。

恭太「暗黒の大自然是猛然と吹雪く。」

恭太の声「吹雪正面より吹きつける。疲労相当なり……」

恭太「三時間ばかり格斗すれば、穂高の頂上へ立てるだろう」

恭太「うん」

恭太「よし」

恭太「三時間ばかり格斗すれば、穂高の頂上へ立てるだろう」

恭太「何を考えている」

恭太「……何も……」

恭太「お前が震えてるんだ。おれのほうは伴振れしてるんだ」

恭太「小坂」

恭太「う……」

恭太「何を考えている」

恭太「……何も……」

恭太「お前が震えてるんだ。おれのほうは伴振れしてるんだ」

恭太「小坂」

恭太「何を考えている」

恭太「……何も……」

乙彦「お前が震えてるんだ。おれのほうは伴振れしてるんだ」

一瞬、猛然たる吹雪で一人はみえなくなる。

恭太「小坂」

乙彦「う……」

恭太「何を考えている」

乙彦「……何も……」

恭太「お前が震えてるんだ。おれのほうは伴振れしてるんだ」

二人はゆっくり煙草をする。

小坂のみさしを抛る。

恭太「何を考えている」

乙彦「行くぞ」

恭太、煙草を捨てて従う。

恭太、それをみるが何もないわない。

二人はゆっくり煙草をする。

小坂のみさしを抛る。

恭太、ビックルを岩の間に立てたまま、乙彦を仰ぐ。

乙彦、五メートルばかり斜め横の壁にとりついでザイルを、頭上に突き出た岩に掛けようとしている。それは一枚の絵のように、すっきり澄んだ人間の像である。

谷間から、猛然と雪が吹きあげてくる。

乙彦の体がするすると岩肌を下降する。

乙彦、雪煙りの海の中へ吸いこまれて行く。

恭太、ビックルを握りザイルを摑む。

乙彦、雪煙りの海の中へ吸いこまれて行く。

恭太声「小坂、お前は好きだったな、デュプラの詩が…」

「モシカアル日
モシカアル日、私ガ山デ死ンダラ

古イ山ノ友達ノオ前ニタ

コノ書置ヲ残スノハ。

オフクロニ会イニ行ツテクレ。

ソシティイツテクレ、オレハシアワセニ死ンダト。

オレハオ母サンノソバニイタカラ、チットモ苦シミハシ

ナカッタ。

親父ニイツテクレ、オレハ男ダッタ。

弟ニイツテクレ、サアオ前ニバトンヲ渡スゾト」

小屋の戸が乱暴に開けられる。

M大学生六人の捜索隊、雪だるまのようになつて

駆けこんでくる。

恭太、反射的に立ち、固い顔で見返している。

学生A「だめでした」

学生B「大雪だ、何もみない」

学生C「おそらくもう、雪に埋つてしまつてますよ」

学生D「雪がやんだら、本谷を丹念にさがすんだな」

小屋番S「雪がやもうが、やむまいが、本谷あたりへ出て

行ってみなさい。すぐ雪崩にやられますよ」

恭太のみじめに泣き出しそうな顔。

小屋番S「小坂さんの体は、わしがここで春まで番をして

るから大丈夫ですよ。それより早く山を降りて、小坂さんの遺族の人たちを慰めた方がいいですよ」

戸が開いて、また眞白な男が二人はいつてくる。

登高出版社の宮川と松枝。

宮川「小坂さんはどうでした？」

松枝「東京の、会社の者ですが——」

事務をとっている一同の視線集まる。

恭太、大作の机の前へ行く。

大作「いつ帰った」

恭太「昨夜です」

大作「ひどく疲れてるな」

恭太「友達を山へ、そのまま置いてきたので、そのことで

気持が参っています」

大作「冬山というものは怖いものだな、しかし怖いのを承

知で出かけたんだから、これも仕方がない。犠牲者の君

の友達には氣の毒だが、たまたま、君でなく、君の友だ

ちのほうが悪いくじを引いたわけだ。いや、もしかしたら、二人一緒にやられたかもしれない。君だけでも帰れ

て仕合せといふものだ」

恭太「はあ」

大作「鋭くザイルは切れたのか」

恭太「(はつきり) はあ、されたのです」

大作「特に尖った岩角へかけるようなことはなかつたのか」

恭太「岩が尖っていたから切れるなんて、そんなザイルはありません。ザイルが弱かつたんです」

大作「よくろう、行つてき給え、どこだ」

恭太「山形の酒田です」

入口へ、本社の時松専務が顔を出す。

時松「常盤君」

大作「うむ、すぐ行く（と立ち）金もいることだろう。会計で借りて行き給え」

と、出て行く。

83 南方ビルの表

大作と時松、出てきて、隣りのビルの喫茶室へ。

大作「そりや、どういう意味だ」

前夜にアイン

90 木一ム

美那子「ザイルは切れたんでございましょうね：もしか」

にならない。

恭太声「小坂、お前は好きだったな、デュプラの詩が…」

「モシカアル日
モシカアル日、私ガ山デ死ンダラ

古イ山ノ友達ノオ前ニタ

コノ書置ヲ残スノハ。

オフクロニ会イニ行ツテクレ。

ソシティイツテクレ、オレハシアワセニ死ンダト。

オレハオ母サンノソバニイタカラ、チットモ苦シミハシ

ナカッタ。

親父ニイツテクレ、オレハ男ダッタ。

弟ニイツテクレ、サアオ前ニバトンヲ渡スゾト」

小屋の戸が乱暴に開けられる。

M大学生六人の捜索隊、雪だるまのようになつて

駆けこんでくる。

恭太、反射的に立ち、固い顔で見返している。

学生A「だめでした」

学生B「大雪だ、何もみない」

学生C「おそらくもう、雪に埋つてしまつてますよ」

学生D「雪がやんだら、本谷を丹念にさがすんだな」

小屋番S「雪がやもうが、やむまいが、本谷あたりへ出て

行ってみなさい。すぐ雪崩にやられますよ」

恭太のみじめに泣き出しそうな顔。

小屋番S「小坂さんの体は、わしがここで春まで番をして

るから大丈夫ですよ。それより早く山を降りて、小坂さんの遺族の人たちを慰めた方がいいですよ」

戸が開いて、また眞白な男が二人はいつてくる。

登高出版社の宮川と松枝。

宮川「小坂さんはどうでした？」

松枝「東京の、会社の者ですが——」

事務をとっている一同の視線集まる。

恭太、大作の机の前へ行く。

大作「いつ帰った」

恭太「昨夜です」

大作「ひどく疲れてるな」

恭太「友達を山へ、そのまま置いてきたので、そのことで

気持が参っています」

大作「冬山というものは怖いものだな、しかし怖いのを承

知で出かけたんだから、これも仕方がない。犠牲者の君

の友達には氣の毒だが、たまたま、君でなく、君の友だ

ちのほうが悪いくじを引いたわけだ。いや、もしかしたら、二人と一緒にやられたかもしれない。君だけでも帰れ

て仕合せといふものだ」

恭太「はあ」

大作「鋭くザイルは切れたのか」

恭太「(はつきり) はあ、されたのです」

大作「特に尖った岩角へかけるようなことはなかつたのか」

恭太「岩が尖っていたから切れるなんて、そんなザイルはありません。ザイルが弱かつたんです」

大作「よくろう、行つてき給え、どこだ」

恭太「山形の酒田です」

入口へ、本社の時松専務が顔を出す。

時松「常盤君」

大作「うむ、すぐ行く（と立ち）金もいることだろう。会計で借りて行き給え」

と、出て行く。

83 南方ビルの表

にならない。

恭太声「小坂、お前は好きだったな、デュプラの詩が…」

「モシカアル日
モシカアル日、私ガ山デ死ンダラ

古イ山ノ友達ノオ前ニタ

コノ書置ヲ残スノハ。

オフクロニ会イニ行ツテクレ。

ソシティイツテクレ、オレハシアワセニ死ンダト。

オレハオ母サンノソバニイタカラ、チットモ苦シミハシ

ナカッタ。

親父ニイツテクレ、オレハ男ダッタ。

弟ニイツテクレ、サアオ前ニバトンヲ渡スゾト」

小屋の戸が乱暴に開けられる。

M大学生六人の捜索隊、雪だるまのようになつて

駆けこんでくる。

恭太、反射的に立ち、固い顔で見返している。

学生A「だめでした」

学生B「大雪だ、何もみない」

学生C「おそらくもう、雪に埋つてしまつてますよ」

学生D「雪がやんだら、本谷を丹念にさがすんだな」

小屋番S「雪がやもうが、やむまいが、本谷あたりへ出て

行ってみなさい。すぐ雪崩にやられますよ」

恭太のみじめに泣き出しそうな顔。

小屋番S「小坂さんの体は、わしがここで春まで番をして

るから大丈夫ですよ。それより早く山を降りて、小坂さんの遺族の人たちを慰めた方がいいですよ」

戸が開いて、また眞白な男が二人はいつてくる。

登高出版社の宮川と松枝。

宮川「小坂さんはどうでした？」

松枝「東京の、会社の者ですが——」

事務をとっている一同の視線集まる。

恭太、大作の机の前へ行く。

大作「いつ帰った」

恭太「昨夜です」

大作「ひどく疲れてるな」

恭太「友達を山へ、そのまま置いてきたので、そのことで

気持が参っています」

大作「冬山というものは怖いものだな、しかし怖いのを承

知で出かけたんだから、これも仕方がない。犠牲者の君

の友達には氣の毒だが、たまたま、君でなく、君の友だ

ちのほうが悪いくじを引いたわけだ。いや、もしかしたら、二人と一緒にやられたかもしれない。君だけでも帰れ

て仕合せといふものだ」

恭太「はあ」

大作「鋭くザイルは切れたのか」

恭太「(はつきり) はあ、されたのです」

大作「特に尖った岩角へかけるようなことはなかつたのか」

恭太「岩が尖っていたから切れるなんて、そんなザイルはありません。ザイルが弱かつたんです」

大作「よくろう、行つてき給え、どこだ」

恭太「山形の酒田です」

入口へ、本社の時松専務が顔を出す。

時松「常盤君」

大作「うむ、すぐ行く（と立ち）金もいることだろう。会計で借りて行き給え」

と、出て行く。

83 南方ビルの表

にならない。

恭太声「小坂、お前は好きだったな、デュプラの詩が…」

「モシカアル日
モシカアル日、私ガ山デ死ンダラ

古イ山ノ友達ノオ前ニタ

コノ書置ヲ残スノハ。

ナイロン・ザイルの衝撃反応実験

102 京浜国道を走る自動車の中（風）

107 ヴィジョン

恭太、大作、乗っている。

恭太「どんな人が立ちあうんですか」

大作「本社から二人、佐倉製鋼から六人、それからおれと

君——（ふとある思いに突き当ったように）君はテストの現場に顔をみせないほうがいいかな：君、やめとけ！君が姿をみせると、当てつけがましくなつていかん、やめとけ！」

103 佐倉製鋼東京工場の前

恭太、下りる。

自動車、門内へはいって行く。

門内の広場に十数台の高級車が並んでいる。

恭太、堀に添つて歩きだす。

104 広い道路の彼方に海

枯れた茅の原が風にそよいでいる。

恭太、ゆっくり、海のほうへ歩いて行く。

十米の鉄骨やぐらに、花崗石のエッジがとりつけ

てある。

作業員がナイロン・ザイルに分銅を結びつけてい

る。

見守る教之助、大作、その他。

105 実験場

恭太、寝転んでいる。静かである。

眼を閉じる。

びゅうびゅうと風の唸り。

106 茅の原

恭太、寝転んでいる。静かである。

眼を閉じる。

恭太、ゆっくり、海のほうへ歩いて行く。

恭太「雪が解け始めたら、すぐ山へ行くつもりでいます」

かおる「わたしもついて行つていいでしよう」

恭太「もちろん結構です」

かおる「わたし、スキーは魚津さんよりうまいかもしけれま

たしが男でしたら、こんな時、魚津さんをお誘いして御

一緒に山に行くんんですけど……」

恭太「雪が解け始めたら、すぐ山へ行くつもりでいます」

かおる「わたしもついて行つていいでしよう」

恭太「もちろん結構です」

かおる「わたし、スキーは魚津さんよりうまいかもしけれま

せん」

恭太「兄さんの死体が出れば、半分の疑惑は解決しますよ

……（自分自身に納得さすように）ザイルは体に巻きつ

けているでしょし、遺書も、遺書めいたものも出ない

でしょう」

かおる「もしも、兄は……」

恭太「強く、そんなことはありません」

かおる「でも、兄が自分でザイルを切つたようなことをい

つてる人も……」

恭太「それは一部の人です」

かおる「八代さん？」

恭太、額をあげて、みつめる。

かおる「わたし、なんだかそんな気がしてなりませんの……わたし、勝手に、兄とあの方は愛人同士だと想像していましたけど、きっと違いますね」

恭太「かおるさん、兄さんが可哀そうだ……そんな想像、しないであげなさい」

恭太「八代家の玄関廊下（風）

美那子「いらっしゃいませ」

恭太「ご主人にお会いしたいと思って伺つたんですが——お留守だそうで」

美那子「はあ、日曜でも、よく、会議があると申しまして——何か」

恭太「実験のことに就いて、もう少し詳しくお聞きしたい

恭太、みつめている。

大作、らんらんと睨みつけるよう、前穂の氷の壁よりも、もっと冷たい地盤に立っているんだ

109 大森坂道（夜）

暗い道を、うちひしがれたような、恭太のうしろ姿が帰つて行く。

110 アパートの玄関

恭太、扉を開ける。

恭太、帰つてくる。

小母さん「お客様ですよ。お部屋で待つていただいている

111 恭太の部屋

恭太、扉を開ける。

管理人室から、小母さんが顔を出し、手をあげて合図し、駆けて行く。

大作「実験はどうでした」

恭太「八代教之助は立派な人間だ。おれは彼を信じる。君も彼を信じなければならぬ。信じられるか」

大作「もちろん、信じます」

恭太「ザイルは、君、切れなかつたよ、マニラ麻よりも、むしろ強いくらいだ」

恭太「さあ、乗れ」

恭太「（はげしく）そんなばかなことが！」

大作「興奮するな、おれも切れると思った……しかし、切れなかつた。」

恭太「しかし、支社長」

大作「（鋭く）文句をいうな」

恭太「でも——」

大作「でももくそもない！」

かおる「まあ」

恭太、鋭く眼を落している。

かおる「わたし、兄のことで、魚津さんが苦しい立場に立つていらつしやるのが辛いんです、どうかして上げた

い気持ちなんですが、どうしていいかわかりません……わ

かおる「ザイルは！」

恭太「切れませんでした」

かおる「まあ」

恭太、鋭く眼を落している。

かおる「わたし、兄のことで、魚津さんはきっとかれてあるだけ。ここにも山の春はきている。

夕闇が下りていて、小屋番のSが迎える。

恭太、かおる、辿りつく。

116 小屋の中

吉川を先頭に、捜索隊の六人、出版社の宮川、

松枝、どやどやはいつてくる。一番あとから六年配の上条信一がはいつてくる。

恭太「やあ、どうも——」

吉川「昨日、第二テラスへ行き、きょう、もう一度本格的にやつたがだめだ。明日B沢をやろう」

上条信一、かおるに近づいて、

上条「小坂さんの妹さんでしょ、よう似とります」

一同、はじめて氣づいたようにみる。

かおる、おじぎをする。

美那子「ライターをごらんになりましたの」

美那子「うるんだような眼でみつめている。やつちやいけません」

恭太「奥さん、ぼく以外の、だれにも小坂のことをおつし

117 雪 原

狭いルンゼに散らばって、探ししながら登る。

先頭に立つて吉川「おーい」と大きな声を張りあげる。

118 B

春はもうきていて——樹々はもう幼い芽を吹いている。

91

- 16
- 131 表 門
大作、出てくる。固く口を結んでいる。
美那子「……」
恭太「奥さん、赤いライターは、小坂君と一緒に山で焼きました」
- 132 二階廊下
教之助、上ってくる。書斎へはいる。
美那子、廊下からはいってくる。
卓の湯のみを片づけようとして膝を折り、一点をみつめる。
何か心にきめたふうに立つ。廊下へ出て行く。
- 133 座 敷
美那子、きて、電話をとりあげる。
美那子「まあ、なぜ……」
恭太「お会いしてはいけないんです……いけないことはやめました」
夕闇のなかに、美那子の顔はあくまで白い。
恭太「ぼくはもう、これきり奥さんにお会いしません」
- 134 廊 下
美那子、きて、電話をとりあげる。
美那子「二人って？」
恭太「一人は生きている人間で、一人は死んだ人間です。
もちろん一人は八代さんで、一人は小坂ですよ」
- 135 日比谷公園音楽堂前
初夏のたそがれ——街燈の灯が夕闇に浮んでいる
恭太、くる。
ベンチの列のなかに、人の影が佇んでいる。美那子である。
恭太、近づいて目礼する。
美那子もだまつておじぎする。
どちらも、そのまま、立ったまま、だまつている
美那子「きょう、常盤さまがおみえになりました」
恭太「はあ、さっき、支社長から、結果はきました……」
ご主人のおっしゃることはもつともだと思います」
- 136 恭太のアパートの部屋
恭太「ぼくは小坂が苦しんだ気持はよくわかりますよ。よくわかるんですよ……あいつの言葉の一つ一つが、いまのぼくにはこたえます。小坂は、あなたに、冬山の岩壁をみせたいといつていきました。実際に彼は心からそう思つたんですよ……ぼくもいま山の氷の壁をみせたい人があるとすれば、失礼ない草ですが、あなただと思ふんです」
かがやく。
美那子、燃えるような瞳で見返している。
恭太「失礼します」
身をひるがえすようにして去り行く。
美那子、佇んだまま……」
- 137 新東亜商事（風）
恭太「いやア、奥さんはもう氣を使わないで下さい」
美那子「……」
恭太「ザイルがどうして切れたか……技術的な欠陥か、取扱いの不注意か、ナイロン・ザイル自身の弱点か……それはもう、山が知っているだけなんです。それでいいんです……小坂君が、自分で切ったのではないことが証明さ
- 138 東京駅ホーム
恭太「五日間、休暇をいただきたいのですが——」
大作「山か」
恭太「はあ、いえ——憩みたいんですね」
大作「まあ、いいだろ、頭を休めてこい。その替り、向う一年間休暇はないよ」
恭太「はあ（改まって）こんどのことでは、いろいろとこ厄介かけました」
大却「うむ、柄にもなく殊勝なことをいうな」
恭太「ありがとうございました」
恭太、やさしく接吻する。
- 139 大正池のほとり
山は初夏の陽のなかに燃え立っている。
かおる「小屋番S上ってきて、一番奥の部屋へ行く。
かおる、上ってきて、立止り、窓をみる。
- 140 河童橋附近
かおる登つて行く。
黒のスラックスに白いシャツ、キャラバン・シューズを履いてルックサックを背負っている。
彼女の足は軽い。
- 141 德沢小屋の表
かおる、立どまり、前を仰ぐ。
夏の青葉が繁っている。
- 142 小屋の中
かおる、はいてくる。
奥から、小屋番Sが出てくる。
かおるS「（明るく）こんにちわ——春にお訪ねした小坂です」
小屋番S「ぼう」
恭太、やあ、あの時の——（顔中ほころばせ）ひとりですか」
かおる「ここで魚津さんと待ち合せるんです」
- 143 二階廊下
三等寝台車の所、登山姿の恭太と送るかおる。
発車のベルが鳴る。
- 144 そびえたつ前穂の峰
空だけ明るく、その姿は無気味に黒い。
ガスが押し包むように吹き流れて行く。
- 145 雪 溪
恭太、一步一歩、登つて行く。
- 146 岩と雪の峰
恭太、登りきて、立つ。
ガスが押し寄せるように流れ、また流れくる。
恭太、煙草に火をつける。
前方、ガスの切れ目に、涸沢岳の西尾根と、細くのびているD沢がみえる。
恭太、煙草を捨て、足でもみ消し、D沢へ向う。
- 147 石がごろごろしている狭いルンゼ
恭太、くる。
ガスが濃く流れ、視界はきかない。
落石の音する。
- 恭太、立ちどまり、耳をします。
恭太、前進する。
一、二間先は白く閉ざされて見えない。
- 恭太、ぎょっと立止る。
地鳴りのような重苦しい音が重なり合い、地軸を動かすような轟然たる音になつてくる。
恭太、引返そうかと後を振り向く。
濃いガスの中に、おぼろに、美那子の顔が浮いて見える。
- 恭太、それをぶり切るように、前を向く。
ガスの中に、かおるの顔が、じっこちらをみつめている。
- 恭太、前進する。



遺 体 収 容

149

足許をさぐるように前進する。彼の心はもう前へ進むことにきまっている。突如、地鳴りの音がガスの中から起つてくる。恭太、はっと立止る。

音は津波のようにひろがる。落下する石が足許に転がつてくる。

恭太「（鋭く叫ぶ）かおる！」

徳沢の小屋の表

朝——雲一点もなく晴れている。

前穂の峻峰は陽にかがやき、大自然は音もなく、静まり返っている。

かおる、小屋から出てきて立つ。彼女の顔は晴れやかに明るい。

と——山へづく道から、一人の山男が急ぎくろ。

何気なく、かおるはその男を見る。

山男は小屋へいる。

ふと、かおるの顔に翳がさす。

小屋の方へ行く。

149

小 屋

かおる、入口にくる。

さつと血の氣の引いた顔になる。

小屋番Sの陽焼けした顔が、こわいほどきびしく

かおるをみつめている。

山男もみつめている。

かおる、恐怖に顔をゆがめ、あとじさりする。

はっとそむけて、山を見る。

150

そびえ立つ峻峰

とぎすましたような鋭い山の姿。

151

汚れたノート

近親者二、三が立っている。

大作、モーニングを着て人の群の中にいる。かおる、もいる。

うしろのほうに、美那子、立っている。

発車のベルが鳴り渡り——列車は動き出す。

一群の人々、おじぎをする。

列車はスピードを増し、人々は散りはじめ、あとに、美那子、かおる、大作の三人が残る。

三人、いい合わしたように、階段のほうへ行く。

152

八重州口の表

かおる、入口にくる。

さつと血の氣の引いた顔になる。

小屋番Sの陽焼けした顔が、こわいほどきびしく

かおるをみつめている。

山男もみつめている。

かおる、恐怖に顔をゆがめ、あとじさりする。

はっとそむけて、山を見る。

153

新東亜商事（風）

全事務員、立っている。

それに向って立つ。常磐大作の顔は固い。

大作「みんな新聞ですでに御承知のことと思うが、ほくた

かおる、「兄の時、魚津さんにやっていたので、こん

どはわたくしが致しました」

大作「いつか、われわれだけで食事をしませんか。席はぼ

くが作ります」

美那子、かおる、うなずく。

大作「では——」

目礼し、踵を返しモーニングの上着をぬいで、雑

沓の中へ大股に——。

美那子「お送りしますわ」

かおる「いいんです、わたし、これから、魚津さんのアバ

ートへ参ります。荷物の整理に——」

女二人、みつめ合う。

自信に満ちたかおるの瞳。

虚しく静かな美那子の瞳。

美那子「失礼します」

かおる、目礼。

美那子、まっすぐに、広場を足早に突っ切つて行

くかおる、見送つて、踵を返す。

大作、再び一同に向う。

（終）

小屋の土間で、かおる、茫然とそれを手にとつて進むことにきまっている。

突然、地鳴りの音がガスの中から起つてくる。

恭太、はっと立止る。

音は津波のようにひろがる。

落石が足許に転がつてくる。

恭太「（鋭く叫ぶ）かおる！」

徳沢の小屋の表

朝——雲一点もなく晴れている。

前穂の峻峰は陽にかがやき、大自然は音もなく、

静まり返っている。

かおる、小屋から出てきて立つ。彼女の顔は晴れやかに明るい。

と——山へづく道から、一人の山男が急ぎくろ。

何気なく、かおるはその男を見る。

山男は小屋へいる。

ふと、かおるの顔に翳がさす。

小屋の方へ行く。

149

小 屋

かおる、入口にくる。

さつと血の氣の引いた顔になる。

小屋番Sの陽焼けした顔が、こわいほどきびしく

かおるをみつめている。

山男もみつめている。

かおる、恐怖に顔をゆがめ、あとじさりする。

はっとそむけて、山を見る。

150

そびえ立つ峻峰

とぎすましたような鋭い山の姿。

151

汚れたノート

かおる、入口にくる。

さつと血の氣の引いた顔になる。

小屋番Sの陽焼けした顔が、こわいほどきびしく

かおるをみつめている。

山男もみつめている。

かおる、恐怖に顔をゆがめ、あとじさりする。

はっとそむけて、山を見る。

152

新東亜商事（風）

全事務員、立っている。

それに向って立つ。常磐大作の顔は固い。

大作「みんな新聞ですでに御承知のことと思うが、ほくた

かおる、「兄の時、魚津さんにやっていたので、こん

どはわたくしが致しました」

大作「いつか、われわれだけで食事をしませんか。席はぼ

くが作ります」

美那子、かおる、うなずく。

大作「では——」

目礼し、踵を返しモーニングの上着をぬいで、雑

沓の中へ大股に——。

美那子「お送りしますわ」

かおる「いいんです、わたし、これから、魚津さんのアバ

ートへ参ります。荷物の整理に——」

女二人、みつめ合う。

自信に満ちたかおるの瞳。

虚しく静かな美那子の瞳。

美那子「失礼します」

かおる、目礼。

美那子、まっすぐに、広場を足早に突っ切つて行

くかおる、見送つて、踵を返す。

大作、再び一同に向う。

（終）

149

小 屋

かおる、入口にくる。

さつと血の氣の引いた顔になる。

小屋番Sの陽焼けした顔が、こわいほどきびしく

かおるをみつめている。

山男もみつめている。

かおる、恐怖に顔をゆがめ、あとじさりする。

はっとそむけて、山を見る。

150

そびえ立つ峻峰

とぎすましたような鋭い山の姿。

151

汚れたノート

かおる、入口にくる。

さつと血の氣の引いた顔になる。

小屋番Sの陽焼けした顔が、こわいほどきびしく

かおるをみつめている。

山男もみつめている。

かおる、恐怖に顔をゆがめ、あとじさりする。

はっとそむけて、山を見る。

152

新東亜商事（風）

全事務員、立っている。

それに向って立つ。常磐大作の顔は固い。

大作「みんな新聞ですでに御承知のことと思うが、ほくた

かおる、「兄の時、魚津さんにやっていたので、こん

どはわたくしが致しました」

大作「いつか、われわれだけで食事をしませんか。席はぼ

くが作ります」

美那子、かおる、うなずく。

大作「では——」

目礼し、踵を返しモーニングの上着をぬいで、雑

沓の中へ大股に——。

美那子「お送りしますわ」

かおる「いいんです、わたし、これから、魚津さんのアバ

ートへ参ります。荷物の整理に——」

女二人、みつめ合う。

自信に満ちたかおるの瞳。

虚しく静かな美那子の瞳。

美那子「失礼します」

かおる、目礼。

美那子、まっすぐに、広場を足早に突っ切つて行

くかおる、見送つて、踵を返す。

大作、再び一同に向う。

（終）

149

小 屋